

独りの行動と眼

宇宙から、回転する地球を観察する様になった。また多くの人は自分史を書く様になった。僕は、「とび出しナイフ」「自画道」「現代美術—僕の場合—」等を自費出版してきた。この外にも多くの原稿があり何時でも本に纏める事が出来る。描く方の制作も、書く方の執筆と共に毎日続いている。例えば 1986 年 10 月からは、特に「縫い」の大作にかかっているが、今では 100—300 号が一応 50 点以上仕上がっている。殆ど未発表である。これらは売る目的ではない。社会生活における弱者が強く生きる執着であり最高の享樂でもある。又この期間には、特別収入で「現代美術—僕の場合—」を著わしている。

一瞬の光でその運命は生死にかかわった人達がいる。また生れながらにしてその身分は備わっていて超エリートコースを歩く人もいる。僕の場合は、無垢な意志で強引にも好きな道へ転回していった。

さて、その始めからの道のりを綴ってみよう——幼児期は養父が炭焼きの関係で山の大自然の中で育った。小学生時代は難聴で口重なため「いじめ」にあうことが多かった。その代りに、独りでものを作る楽しみを覚えた。占師から「この子は成人しない、しても自殺する」と母は聞いた。これについて触れるならば、奥丹後の大地震の時、家屋倒壊寸前に、90 歳の巫女によって暗がりを脱出。また吐血して意識不明の時は、「明日までの寿命」と医師の診断であった。この外にも死神に狙われた様にいろいろな事が起きている。

貧生活の中を小卒で奉公に出る。そして独りで学んでいたが画家志望で家出した。この時は神戸、横浜などを放浪したが、賭博という底無し沼に嵌り込んでもがいた。又その資金稼ぎには重労働で追いたてられて、その肉体的、精神的苦痛の試練は人知れず独りで堪えねばならなかった。血腥いケンカもあった。ついには兵隊検査逃れのため、生還望めない道と、裸で郷里に戻るのとの岐路で迷った。

今度は都会のやくざ生活から一挙に、田舎のエリート環境に就職してきた。ここでは劣等感にさいなまれながらも、腰を据えて場違いなことを独りで学ぶことが出来た。古い本には「シュールリアリズム」も「ダダ」もあった。

僕の職業的体験には、手先によるものとしては「単純な手縫い」「塩の荷造り」。視覚によるものでは、「造船」「鑄造」「製鋼」等の作業現場である。中でも鉄の沸騰は気弱な僕を奮いたたせるものがあった。今思うにこれらは、如何なる逆境にあうとも己の眼を偽るな。一と。

1992. 2. 上前智祐

ギャラリー無有 小冊子「上前智祐」(1992年発刊)掲載